

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六二年 四月 六日 横浜定例講演より

『神葬祭かくあるべし』②

神道は全て 清めに清める

次の日には、はつきやうさい 発柩祭・葬場祭・火葬祭
を行う。これも祝詞がいます。発柩祭は一般的な意味では出棺です。「いよいよ出棺をしますよ」ということです。棺は斎場へ向かいます。家の方は被い清めが必要です。神道で一番大事なのは、この被い清めです。もう「清めに清める」という程大事なのです。棺が出た後、家の中、残っている人、全部を被い清めるのです。

これが十二分に出来ていないといけない。神道はむしろ、清めに清めるということから、すべての行事は最初にまず、家の中を清めることから始まる訳ですけれども、出棺の後も清めをする。

この発柩祭詞の中には「いやはて最後の御祭任へ奉らむとす」と言いますけど、これで、最後のお別れですよという事を奏上して、お別れの儀式をする。この後八番目が葬場祭詞となる訳です。

真実と 異なる現実

これは本来斎場へ行って行うのですね、次から次へと、火葬に付す車が来る訳ですから、斎場へ行ってから、葬場祭詞を奏上する時間がありません。斎場へ行くとすぐ、「はい、次ですよ、次ですよ」とされてしまいますから、従ってこの発柩祭詞をすると、本当は出棺なんですけれども、元の家のところで、葬場祭詞までやってしまう。

ですから、お顔が見られるのは、棺の蓋を開けるのは発柩祭までです。もう葬場祭詞からは無いのです。事実とかなり食い違ってきています。需要というか多過ぎる為に、ここまで自分の家でやらざるを得ない。これは本来、斎場でするものです。そして、いよいよ火葬する扉の真ん前で、火葬祭祀を奏上して、終わったら棺を扉を開けて中に入れるのです。

すでに遷霊詞でもって、亡骸と御霊とは離れておりますから、遷霊詞から後のものは全部亡骸に対する行事です。ですが、万一にも御霊が入っていたら大変な事になります。御霊が焼かれてしまうことになるからです。そうして、十番目が今度は、帰家祭という事になります。

帰って来てから、「滞りなく火葬を終えました」という、帰家祭になります。これも本来は神道ではもう火葬場から埋葬に行く事になって埋葬祭を行い、亡骸は戻らない事になっている。

そうして滞りなく火葬を終えたという報告を御霊代にする。火葬にした後、埋葬も終わりましたという事を本来は申し上げる

事になっているのです。これで、いわゆる神葬祭の方も終わる訳です。

次に翌日からはれいぜんさい霊前祭で、最初は翌日祭と言ひ、翌日祭詞を奏上する。今日行つたのはこの翌日祭です。

翌日祭から後は全部、れいぜんさい霊前祭として十日毎に、十日祭・二十日祭・三十日祭・四十日祭を行い、通常の方の場合は五十日祭でもって一応終えることになっています。この後は百日祭・一年祭です。

もちろんその間毎日、日供を行う訳です。一応大きな節目として五十日祭までは十日毎に行うことになっています。神道は十日毎にという事で、五回目で五十日祭となりますけれど、仏教の方で行くと七日毎です。七日毎で七回という事で、七七〓四十九日という事で一つの区切りになっています。

「命」になる

と いう こと

みこと現在とはどちらで行っても良いと
みこというお許しを頂いております。逆に
 大神様の方から、「神道で行うのか、
 仏（教）で行うのか」という事を問い掛けられます。

そして、どちらでも良いけれども、ただどちらで行うかによって道が違ふということ。それは、仏（教）でする時には、いわゆる仏界までの道を作って下さい。神道でする場合には、神界までの道を作られます。そういう事で、どちらでするかということ聞かれます。

現在では仏界とか神界に行ける人は殆どいない。しかし、その道を開けて下さる。そこで、生前のお名前の後に、男性はうしろの大人の命、女性とじのは刀自之命と言ひけれども、果してこの『命』になれるかということ。『命』とは神様の御言葉みことばを伝えられる人のことですから。

仏教で言っても、皆さんは「成仏して下さい」と、言葉では言うけれども、「成仏」とは何か。「仏に成る」という事です。亡くなつてすぐの人が仏になれますか？「成仏して下さい」と言う言葉の裏返しは何か？「迷つて私に憑いちゃ嫌よ」と言っているようなものです。

そうですね。「迷わず成仏して下さい。迷つて私に憑かれたらどうしよう」と言っている訳ですね。成仏する訳がないですよ。亡くなつてすぐ仏の世界なんてね。お母さんが神界にポンツと行けたつていうのは、例外中の例外です。一般の方が成仏する、亡くなつてすぐに仏の世界になつて行ける訳がない。皆さんはそれを平気で「成仏して下さい」と言っている。

そして、必ず「迷わず」と付ける。「迷わず成仏して下さい」と言う。要するに、「帰つて来たら嫌よ」って、「私に懸かつちや嫌よ」って。「とにかく、真つ直ぐ向こう向いて行つてね」という事を言っているだけで、本当は「成仏してくれ」じゃないの、「迷つて私の方へ戻らないで」って言いたい、皆。本音はそこにあると思う。その『命』、或は『成仏』という事が本当に出来るのだろうか。

神道ではもう命名の中に入る訳ですから。大人之命とか、刀自之命と入る訳だけでも、もうそれ自体が本来は付けるべきではないという気がします。神道ですとしても、大人之命、刀自之命と言える方は殆どいないのではないかと。ここで、ご神縁を頂いて、普段に清まっている方でないと無理です。

前にもお話ししたけれども、この『命』というのは、『御言葉』の略で、神様の御言葉を伝えられる人という意味なのです。ここには、「神様の」という意味が省略されている訳です。御言葉を伝えられる人が命様です。

「〇〇大人之命うしのな」、「〇〇刀自之命とじのな」となれるのは、それが出来る人なのです。神様の御言葉を伝えられる人なのですから、亡くなってすぐに神様の御言葉を伝えられるかと言ったら、「それは無理よ」ということになる。

「命様」に 生前に神様のご存在も信じなければ、神様・仏様に手を合わせたこともない人が、どうやって神様のお言葉を伝えられる人になれるのでしょうか。神様のお言葉を伝える以上は、神様からのお声が聞こえない限り、お伝えのしようがないのです。

まして、狐・狸の動物霊のあやつりを神様のお言葉の如くに、人心をまどわせた「狐憑き」の様な人は、神様の方が神と狐・狸を一緒にするかと相手にしてもらえない筈です。

世の霊能者と称している方々の多くは、こうした動物霊を神様と間違えていることがあります。

また、自我が強い間、自我を持っている間は、自分が「ああしてほしい、こうしてほしい」が先にあるから、どうしても神様が「このようにせよ」「人人にこう伝えよ」と言われても、「それより前に私のこれをしてちょうだい」、「私のこれが終わってからね」なんて言っているようでは間に合いません。大事な時に御言葉は伝わらないのです。

神様の支えの 必要だからこそ出られるのであ
もとに修行を

「後で」は役にたたないのです。だから、そうした『自我を取り、今なすべきことをただちに直なおく行えるよう、あの世での修行をしてこい』ということになります。『それまでは神の手伝いをするのはまかりならぬ』ということですね。それが霊界・幽界での修行です。

自分についた汚れ

それは我欲・嫉妬・憎悪・恨みなどの思いが
自らの中にこびりついて取れないものは
まずはそれを取るための修行が要る

少なくとも自らを省みてみよ

自分の今までの人生にわたって
心の奥底にこびりつかせた恨みや憎悪を